日本医史学雑誌　第63巻第3号（2017）　263–274

華岡青洲の門人・小田順亭（魯庵）による華岡流麻酔法を用いた手術事例

金谷　　貢[1)]，金谷　桂子[2)]

[1)] 新潟大学大学院医歯学総合研究科 生体組織再生工学分野，[2)] 周明館 新潟

受付：平成28年9月27日／受理：平成29年4月12日

要旨：華岡青洲の教育業績の評価を高める事例が近年発掘されている．そのような事例の一つとして，青洲門人・小田順亭（魯庵）による麻沸湯を用いた手術例を発掘した．順亭には別の師として日出藩の帆足萬里がいる．今回，萬里から順亭に贈られた賦の原史料を再発見した．この史料には，萬里の妻，さきの乳房の病を順亭が麻沸湯を用いて手術した旨が記されている．また，この手術の別の証拠となる，萬里の吉井改邑宛書簡も再確認した．帆足萬里全集に活字化された賦には重大な誤植が見られる．帆足萬里全集記載の賦の作成年を基にすると，さきの術後生存期間は6年2ヶ月以上の可能性がある．さきの正確な戒名は法運院貞譽心月妙光大姉である．もう一例，順亭は1848年に日出藩主，木下俊方公の痔の手術も行った可能性がある．

キーワード：小田順亭（小田魯庵），華岡流麻酔法，麻沸湯，華岡青洲門人，帆足萬里門人

1. 緒　言

華岡青洲は20年に及ぶ度重なる実験の末に[1)]，麻酔薬「麻沸散」[1,2)]（別名，「麻沸湯」[1)]，「通仙散」[1,2)]）を開発し[1,2)]，文化元年10月13日[3)]（1804年11月14日，以下，西暦（グレゴリオ暦）表示は『日本暦西暦月日対照表』[4)]に準拠）に全身麻酔下での手術を世界で初めて行ったことで知られている[3,5–7)]．その業績はアメリカ合衆国シカゴ市の国際外科学会栄誉会館[8)]（International Museum of Surgical Science, Japan Room[9)]）にも顕彰されており，青洲が行った研究および臨床に関する業績は高く評価されている．

しかしその一方で，青洲はその麻酔法を公開せず，秘伝として子孫や高弟にのみ教える傾向があったのでその後の発展をみなかった[10,11)]，という見方がされてきた[12,13)]．言い換えれば，青洲が行った教育に対する評価はあまり芳しいものではなかったと言えよう．このような状況の下，松木は，青洲の門人たちの業績が発掘されずに埋もれている可能性があると考え，その発掘に努めた[12,14)]．その結果，それまで知られていなかった，津軽地方における（弘前藩中）三上道隆[15)]，福井藩の橋本左内[12)]，常陸における結解庸徳[16)]，江戸における宮河順達[17)]および佐賀地方における進藤寛策[18)]の各事例を発掘した[19)]．また，山内らは美濃地方における不破為信廉齋・為信杏齋親子の事例を[20)]，梶谷は出雲地方における大森泰輔・加善親子の事例[21)]をそれぞれ発掘した[19)]．さらに，青木は佐賀における井上友庵の事例を発掘した[22)]．

筆者らは以上のほかに，華岡青洲の弟子としては無名に近い，小田順亭が華岡流麻酔法を用いて手術を行ったと考えられる事例を見いだし，その一部を本学会で報告した[23)]．本論文では，青洲の弟子による華岡流麻酔法の普及を示す事例の一つとして，豊後国日出藩（現在の大分県内）における小田順亭の事績について，重要な部分については探索した原史料（一次史料）を根拠として系統的かつ詳細に検討した．

2. 小田順亭の略歴

『華岡青洲先生及其外科』の「華岡青洲先生春林軒門人録」には，「豊後」の条に，「天保四，六，一〇　日出倉成村木下大和守内　小田順亭」とあり，春林軒所属となっている[24]．「木下大和守」は，日出藩第13代藩主の木下俊敦公[25]である．

順亭はその出身地である，旧日出藩領[26]近辺では「小田魯庵（ろあん）」の名で知られ，その略歴はいくつかの文献[27–34]から知られるが，それらの内容には出典不明の記述や重複した記述が多いため，出典の調査と記述の整理を行った結果，次の3つが大元の史資料として重要と考えられた．

① 小田順亭（魯庵）の墓の『墓誌銘』（墓は大分県日出町の松屋寺墓地の[32–36]「魯田先生之墓」[32,34,35]．墓誌銘は『毛利空桑全集』に「小田子順墓誌銘」として収載[36]．）

②『帆足萬里全集―上巻』収載の「帆足萬里先生小傳」の順亭（魯庵）に関する記述[28]

③『帆足萬里先生略傳』の順亭（魯庵）の条[27]

以下，①，②および③を基に，彼の略歴を紹介する．

小田順亭（魯庵）は速見郡倉成村高取の人である[27]．小田良珉の長子で[36]，諱は健，字は子順，号として魯庵，魯田，通貞を用いたことが知られている[36]．最初，帆足萬里の門人となり[28,36]，萬里の紹介で[28]紀伊の華岡青洲の門人となった[27,28,36]．その後，産科の香川（筆者注「賀川」が正しいと思われる[37]）・奥の両師に学び[36]，帰郷して開業し[36]，豊後第一の外科医と称された[28]．日出藩の医員となり[27]，中士にまで進んだ[36]．明治4年3月2日（1871年4月21日），63歳で歿した[36]．浮屠名（戒名）は禄寿院嘯岩魯庵居士[36]．歿年より逆算すると生年は文化6年（1809年）となる．

3. 小田順亭の外科医としての能力

順亭は，今日，華岡青洲の門人の中では無名と言っていいが，その外科医としての能力は如何ほどであったであろうか．

華岡青洲の門人，大森泰輔・加善父子が残した数多くの史資料が，島根大学附属図書館医学分館に大森文庫として収蔵されている[38]．それらの中に大森泰輔著『南遊雑記 二』[39]があり，その中の「天保五午四月十九日迄在塾門人席序」は翻刻[39]および写真提示され[40–42]，一覧表にもなっている[40,42]．これは，華岡医塾の本塾である「春林軒」にこの日付時点で在塾していた門人36名の門人録である．

その中に「小田順亭」の名があり，「内塾」と朱文字で付記されている[40–42]．よって，順亭が内塾生であったことは間違いない．この36名は内塾，外塾および新塾のいずれかに属していた[40,42]．松木によれば，春林軒は，「入門した医生はまず新塾に入り，空きがあれば，外塾に移り，最後に内塾に進んだ．内塾に進めば青洲から直接診療，手術の手ほどきを受けることができた．内塾は経験年数の多い高弟たちの塾であった．」[43]とある．また，『南遊雑記 一』の一丁裏，あるいは『華岡青洲先生及其外科』に収載されている「師家勤式」には，それぞれ「一　出勤の節は，順平様修平様始内塾夫々名を唱ひ，挨拶可致，……」[40]，「一，出勤の節は先生は勿論修平先生娘（ママ）内塾，夫々名を唱挨拶可レ致事．」[44]（異体字は当用漢字になおした）とあり，これらからも内塾生の席次の高さがわかる．以上より，順亭は上記，天保4年6月10日（1833年7月26日）の入門から，在塾門人席序表題中の日付，天保5年4月19日（1834年5月27日）までの10ヶ月間で，かなり高い席次へ進み，青洲の麻酔や手術を間近で見たり，青洲から指導を直接受けたりしたことは確実と考えられる．

『南遊雑記 二』には小田順亭に関係する別の記録もある．順亭が行った手術に対して，守安昌平が異論を唱えた事例として，梶谷はその内容を活字化して記している．「五月一日，如図（図なし）肥前瘡のよりたるもの来る，順亭公深く切断す，昌平子曰，如此切るには及ばず，針してメイチヤをさして可なり，凡て結毒は少（ちいさ）くても不切は不治もの也，余の瘡は結毒の如く切るには不及もの也（「南遊雑記 二」）」[39,45]．これは順亭が春林軒で実際に手術を行っていたことを示す記録である．さらに梶谷によれば，「華岡家では，門人が診察する場合，必ず複数の門人が立ち会い，診察後，門

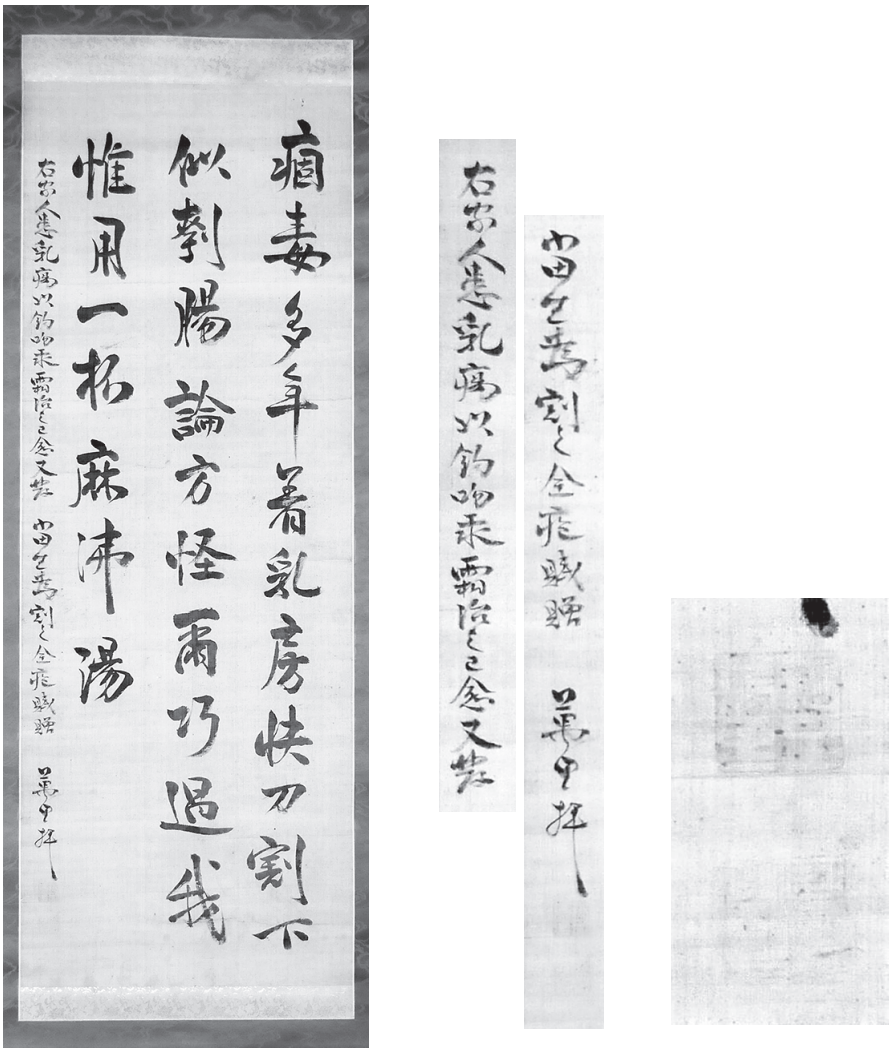

図1　帆足萬里が小田順亭（魯庵）に贈った賦（幅）．左：全体像，中央：款記の拡大像，右：2つの落款印の補正処理後拡大像．落款印はかなり退色しているため，コントラストや明るさ等の補正処理を強めに行ったものを右図に示した．2つの印のうち，上の方は白文印であり，「帆足萬里」の「足」（印影内の右下）と「里」（同じく左下）が確認できる．（本紙寸法：縦 約120 cm，横 約45 cm．大分県杵築市，矢野東鉄雄氏蔵（調査当時））

人間でその処置について議論を行っていた.」[45]とあることから，順亭は自分が執刀もしくは立ち会った症例，およびそれらについての症例検討会とも言うべき議論を通して，多くの知識と術を吸収していたと推察される．

4. 小田順亭が華岡流麻酔法を用いた手術事例

筆者らは，長い間所在不明であった，帆足萬里が小田順亭（魯庵）に贈った賦の原史料（幅）を今回，再発見した[23]．図1にその写真を示す．

この賦は『帆足萬里全集―上巻』に読点と返り点を付して収載されている．それを七言絶句，款記の順に示す．

「痼毒多年著二乳房一，快刀割下似レ割レ腸，論レ方怪爾巧過レ我，唯用一杯麻沸湯，

山妻患二乳瘍一，以二鉤吻汞霜一治レ之，已痊又發，小田生爲割レ之，賦謝，」[46]

七言絶句については，帆足が次の書き下し文を示している．

「痼毒多年乳房に著し．快刀割下腸を刳(えぐ)るに似たり．方を論じ怪しむ爾(なんじ)の巧我に過ぎるを．唯用ふるに一杯の麻沸湯」[47]

『増補 帆足萬里全集―第4巻』の年表によれば，この賦は「弘化3年丙午」（1846）の作となっている[48]．

次に，上の全集―上巻の記述を参考に，図1を活字化し，句読点と返り点を付して示す．

「痼毒多年著二乳房一，快刀割下似レ刳レ腸，論レ方怪爾巧過レ我，惟用一杯麻沸湯．
　右，家人患二乳瘍一，以二鉤吻汞霜一治レ之，已念二又発一．小田生爲割レ之，全痊，賦贈．萬里拝．」
（書き下し文：七言絶句は，上記，帆足が示した文の「唯」を「惟」に改めればよい．款記は，「右，家人乳瘍を患い，鉤吻汞霜を以て之を治め，已(すで)に又発するを念(おも)う．小田生爲(ため)に之を割き，全く痊(い)え，賦して贈る．萬里拝．」）

この賦には，萬里の妻（秋山氏・さき，詳しくは後述）が乳瘍を患い，鉤吻[49]や汞霜[50]といった薬で治療するも，ぶり返すのを危惧する状況にあったが，順亭（魯庵）がこのような事情のために，麻沸湯を用いた全身麻酔下で手術を行い，全治し，萬里が順亭（魯庵）に賦を贈ったことが明記されている．

七言絶句において，結句は言うまでもなく，全体を結ぶ役目をする．その重要な句に麻沸湯を用いたくだりがあることは，この手術に麻沸湯が用いられたことを強調しており，加えて，この手術を成し得た主要因は麻沸湯を用いたことにあると萬里が認識していたこと，および麻沸湯の威力が萬里の心に強烈な印象を残したことを示唆していよう．

手術の行われた時期も重要であるので，次に考察する．この手術の後，萬里の妻の容態が安定してから萬里が賦を作ったであろうことを考慮すると，手術から賦が作られるまでには1～2ヶ月，場合によっては数ヶ月以上の間隔があったと思われる．このことから，手術は，賦が作られたのと同じ弘化3年に行われたか，もしくは賦の作られた時期が弘化3年の初め頃とすれば，手術は弘化2年中，とくに同2年の後半に行われた可能性が高いと思われる．なお，全集において賦の作が弘化3年とされている根拠を，今後探索することも必要であろう．

上記の賦が収載されている『帆足萬里全集―上巻』は1926年刊行であり[51]，この賦は90年も前に公表されていることになる．しかし，研究者の間で，「青洲門人による華岡流麻酔法の普及を示す事例」として言及されず，広く知られていなかった．したがって，青洲の無名と言ってよい弟子・小田順亭による，豊後国における華岡流麻酔法の普及を示す事例を今回，発掘したと言ってよいであろう．

この原史料と上の全集の記述を比較すると，七言絶句においては，上述したように結句の「惟」が全集では「唯」となっており，1文字の違いが見られる．この両文字は異体字ではないので，「惟」で活字化するほうが適当である．さらに，款記のほうには原史料と全集の間で次のようにかなり多くの違いが認められる．原史料に見られる，「右」「全痊」「萬里拝」の6文字が全集では欠落しており，「家人」が「山妻」，「念」が「痊」，「贈」が「謝」と，4文字が誤って活字化されている．このため，款記については原史料の内容が正確に伝わらず，全集の記載内容には重大な誤植があると言わざるをえない．

ところで，この手術については，萬里が吉井氏に宛てた書簡にも記されている．その書簡の原史料を図2に示す．これは下に示す，1938年[52]（『増補 帆足萬里全集―第4巻』の原本である私家版の発行年）頃の所有者「武内勢平氏」しかわからなかったところから探索して，今回，見つけ出したものである．

次に，『増補 帆足萬里全集―第4巻』に収載されている本書簡から，順亭が行った手術に関係す

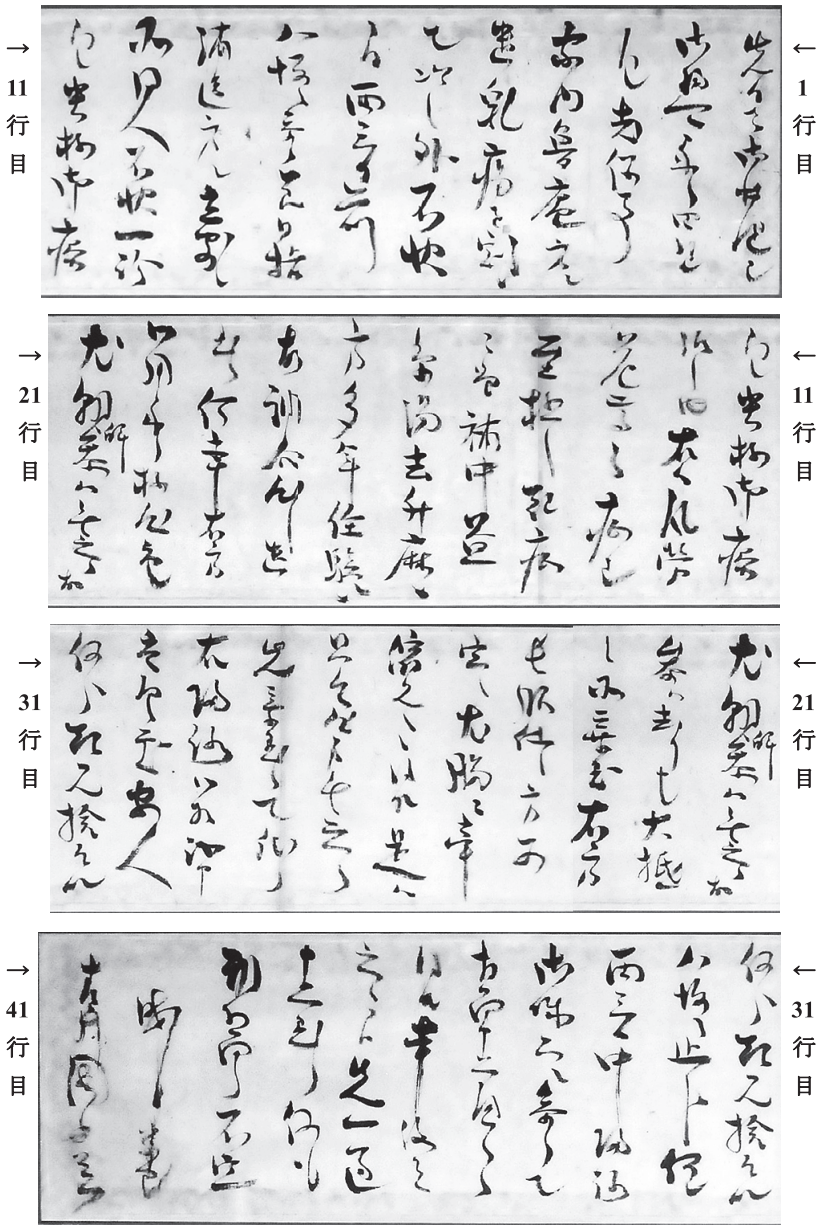

図2　帆足萬里が吉井改邑に送った書簡．横長の書簡を4分割して表示．上段から下段への移行部の行は重複して示してある．（寸法：縦 約16 cm，横 約153 cm．大分県日出町，武内　淳氏蔵）

る部分を含め，必要と思われる箇所を抜粋する．

「吉井改邑宛

二〇六，日指浦造危篤之症　武内勢平氏蔵……老僕儀家内魯庵方ニ遣　乳瘍を割候て以之外不快ニ付両三日前八坂ニ參候節……家人何分難見捨候段　八坂ニ止申候何レ両三日中……不宣

晦日　萬里

吉井國手足下」[53]

ここで，この萬里全集一第4巻の記述を参考にして，図2（全41行）の当該部分（l.3–8，l.30–33および l.39–41）を活字化して示す．

「……老僕事家内魯庵方ニ遣　乳瘍を割候て以之外不快ニ付両三日前八坂ニ参候節……家人何分難見捨候段　八坂ニ止申候何レ両三日中……不宣
　晦日　萬里
吉井國手足下」

この原史料と上の萬里全集―第4巻の記述を比較すると，原史料の3番目の文字である「事」が全集―第4巻では「儀」となっており，1文字の誤字を見いだした．

この書簡には麻沸湯を用いたことの記述はないものの，萬里が妻を順亭（魯庵）のところへ遣って乳瘍の手術をした旨は示されており，上述の賦に記されている乳瘍の手術が行われたことを示す，別の証拠と言える．手術に関する記述内容が賦と書簡で一致していることは萬里全集―第4巻に記されているところであるが[53]，ここでは書簡の原史料を再確認したことに意味がある．それは，全集の記述に誤字を見いだしたことからも明らかであろう．

なお，書簡の最後に「國手」の敬称が付されているので，吉井氏[54]は医師であることがわかる．

5. 患者である帆足萬里の妻の術後生存期間

患者である萬里の妻の術後生存期間については，麻酔および手術の成否の観点から重要なところである．

上述のように，手術が行われた時期として，弘化2年とくにその後半か，弘化3年が想定されるが，ここでは，術後の生存期間を敢えて短く見積もることを前提に手術日を想定する．すなわち，賦は弘化3年（1846-1-27～1847-2-14）の末日である大晦日に作られたとし，手術もその日に行われたと仮定する．

次に，萬里の妻とその歿年月日について考察する．萬里はその生涯に都甲氏と秋山氏の二人を妻としている[55]．『増補 帆足萬里全集―第4巻』の年表の天保8年（1837）の欄に，「夫人秋山氏の父逝去　賀来睦之へ秋山氏治療を依頼する状あり」[56]とあるので，すでにこの年には萬里の妻は秋山氏となっている．したがって，弘化3年（1846）に作られた賦に記されている妻は秋山氏のほうである．同年表によれば，秋山氏は名を「おさき（さき）」といい，その歿年月日は嘉永6年3月11日（1853-4-18），法号（筆者注　次にあるように，菩提寺の龍泉寺は浄土宗であるから，「戒名」が適当と思われる）は心月妙光大姉，墓は龍泉寺畔となっている[57]．

そこで，原史料たる龍泉寺の墓および過去帳を実際に確認した．図3に墓の，図4に過去帳の写真をそれぞれ示す．図3からわかるように，墓の竿石の正面に「心月妙光」，左側面に「文簡帆足先生之配秋山氏嘉永六年癸丑三月十一日卒」とあり，秋山氏が萬里の妻であること，およびその戒名の「心月妙光」と歿年月日が上記年表と一致することを確かめた．「文簡先生」は萬里の私諡である[58]．また，図4からわかるように，過去帳の「嘉永六癸丑年」の記録の2番目に，「法運院貞譽心月妙光大姉　三月十一日　帆足龍吉養母[59]」とあり，墓の場合と同様，萬里の妻の戒名の「心月妙光大姉」および歿年月日が上記年表と一致していることを確認した．加えて，戒名は，上記全集の年表で知られている「心月妙光大姉」のみではなく，院号「法運院」と誉号「貞譽」も付されていることが明らかになった．

以上，手術が行われた時期として仮定した，弘化3年12月末日（1847-2-14）から，歿年月日の嘉永6年3月11日（1853-4-18）まで，さき夫人は手術後，最短でも6年2ヶ月間（西暦で計算）は生存していた．手術の行われたのが仮定より前であれば，その遡った期間が生存期間に加えられることになる．たとえば，上で考察したように，手術が弘化2年の後半で，かつその早い時期であった場合，生存期間は1年6ヶ月程長くなり，7年8ヶ月間程度となる．

いずれにせよ，賦の作成年が弘化3年で正しいとすれば，萬里の妻，秋山氏・さきは術後6年2ヶ月以上生存していたと考えられるから，この麻沸湯を用いた全身麻酔および乳瘍の手術は成功であったと見てよいであろう．

図3　帆足萬里の妻，秋山氏・さきの墓．左：正面の全体像，右：竿石の正面と左側面の像．左側面に「文簡帆足先生之配秋山氏嘉永六年癸丑三月十一日卒」とある．（墓の高さ：約146 cm，竿石の高さ：約63 cm．大分県日出町，龍泉寺墓所）

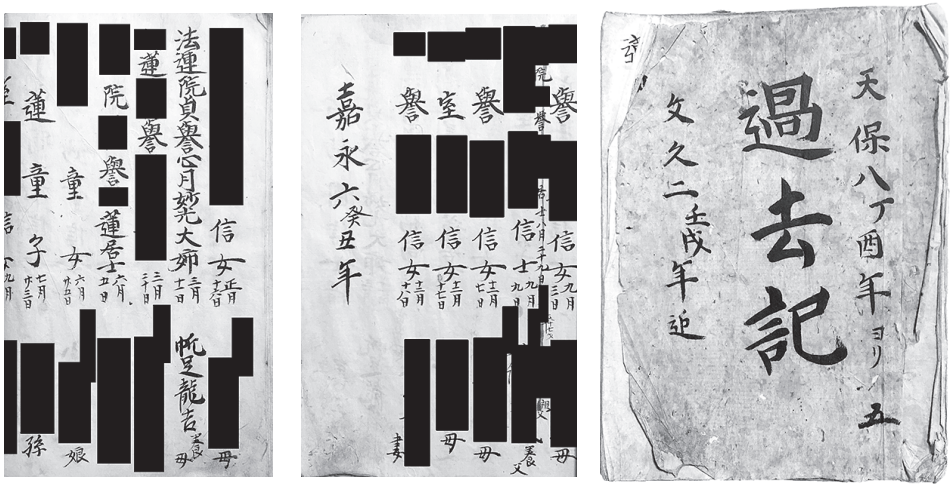

図4　帆足萬里の妻，秋山氏・さきの戒名と歿年月日が記載されている龍泉寺の過去帳．右：表紙，中央：「嘉永六癸丑年」の記録が始まる丁（表），左：中央の写真と同じ丁の裏「法運院貞譽心月妙光大姉　三月十一日　帆足龍吉養母」とある．（住職・山﨑祐介上人より提供および許可を得て掲載．帆足萬里・さき夫妻の直系子孫の存否は現在不明．過去帳寸法：縦 約28 cm，横 約20 cm．大分県日出町，龍泉寺蔵）

6. 萬里の妻・さきの乳瘍は乳癌か否か

青洲の門人，千葉良蔵は「辨乳岩証幷治法艸稿」に，青洲の教えによる乳癌の徴候と症状や鑑別診断などを書いている[60]．この写本が書かれたのは1811年であり，順亭が春林軒に入門する20年以上前である．また，「乳岩辨証」や「乳岩辨」は「辨乳岩証幷治法艸稿」の書写が繰り返された際に他

の論文等が付加され，題名も変化した写本である[60]．「辨乳岩証幷治法艸稿」と「乳岩辨」にはそれぞれ「一乳岩乳靡大ニ異ナリ……」および「乳岩ハ乳靡ト大ニ異也……」とあり，「乳岩」と「乳靡」が異なることが記されている[60]．さらに，上述のように，順亭と同時期に学んだ大森泰輔の上記『南遊雑記 二』の29丁表から裏にかけて，「乳核も乳岩と別物に非ず，然ども軽きと重と也，是は岩の如く角(かど)不立，美しく丸みありて岩の如く堅からず，乳靡は常の腫物に不替，岩核とは格別なり」[39]とある．以上より，春林軒では「乳靡」は「乳岩」等と異なり，良性腫瘍として区別されていたことが読み取れ，順亭（魯庵）は「乳岩」と「乳靡」の鑑別はできたはずと考えられる．

ところで，帆足萬里にも「乳岩辨」なる論考がある[61]．これには，第一候～第七候に分類された乳癌の各段階が示されている．また，男性の乳癌症例として，「……雲州神古志一男子年四十餘患乳岩請診右乳結核径二寸許頑硬如石外発赤暈其候既在第三四候……」とあり，萬里も乳癌の鑑別診断をしたことが読み取れる．萬里のこの知識がさき夫人の手術の前に得られていれば，順亭（魯庵）と萬里の二人がさき夫人の病を診断した可能性がある．逆にこの知識を得たのは，さき夫人の手術の後であったとしても，順亭が主治医として診断をしたことに変わりはない．

いずれにせよ，さき夫人の病は「乳靡」と診断され，順亭が「にゅうよう」と発音した語を萬里が上記の賦の款記および書簡に「乳瘍」と誤記したことが推察される．もし，さき夫人の病が「乳岩」等と診断されていたら，款記と書簡にはそのように記されたのではあるまいか．すなわち，款記および書簡に「乳瘍」と記されていることは，さき夫人の乳房の病が「乳岩」と診断されなかったことを示唆している．

乳癌か否かについては次のようにも考察される．松木は呉の著書に掲載された「乳巖姓名録」[62]中の33名の患者について，歿年月日を鋭意調査した[63]．その報告から各患者の術後生存期間を西暦で算出すると，乳癌患者は術後5年未満で82%が亡くなっている．よって，術後6年2ヶ月以上生きた，さき夫人の乳瘍は確率的にも乳癌ではなかった可能性が高いと推察される．

ただし，上述の鑑別診断に誤りがなかったとは言い切れないことや，乳癌であっても華岡流麻酔法を用いた場合の5年生存率は18%（上記，5年未満で亡くなる場合の余事象）となるので，さき夫人が乳癌であった可能性は低いながらも残っていよう．

7. 小田順亭が華岡流麻酔法を用いた可能性がある別の手術事例

上述したように，順亭（魯庵）の墓の墓誌銘は，『毛利空桑全集』に「小田子順墓誌銘」として句読点と返り点を付して収載されている[36,64]．

その墓誌銘の中に，「……．嘉永元年城主寢二痔漏劇証一．先生，力請．乃令二君運一レ刀．君釈二褐階下士一[65]．城主果痊而東．於レ是乎名益轟．治益富．安政四年階二中士一．……」[36]とある．そこで，原史料である，その墓を実際に確認した．図5に墓誌銘の当該部分の写真を示す．墓の竿石の正面には，上述した文献[35]にも写真で示されているように「魯田先生之墓」とあり，右側面から背面，さらに左側面へと3面にわたって，墓誌銘が刻まれている．図5は背面の一部である．

上の引用部分のあたりのことを記述している文献[32–34]も参考にすると，上の内容の大意は，「嘉永元年に城主が重い痔を患い，順亭（魯庵）が請われて手術をした．順亭ははじめて仕官し下士にのぼった．城主の痔は痊えて，東する（参勤する）ことができた．これによってその名はますます轟き，医業はますます栄えた．安政四年に中士にのぼった．」となろう．嘉永元年（1848）時点の城主とは日出藩第14代藩主の木下俊方公である[25]．

このように，順亭（魯庵）は日出藩主，木下俊方公の痔の手術も行った可能性がある．ここには華岡流麻酔法が用いられたことは記されていないが，実際に麻沸湯を用いて萬里の妻の手術を行った順亭のことであるから，その後に行った，藩主の痔の手術にもその麻酔法を用いたはずと考えるほうが自然であろう．ただし，松木は華岡青洲の墓誌銘に誤りがあることを指摘しており[66]，この

図5　小田順亭（魯庵）の墓の墓誌銘（一部抜粋）竿石の背面の右から2～4行目の像「……嘉永元年城主寝痔漏劇証先生力請乃令君運刀君釈褐階下士城主果痊而東於是乎名益轟治益富安政四年階中士……」とある．（墓の高さ：約200 cm，竿石の高さ：約117 cm．大分県日出町，松屋寺墓所）

例から，順亭（魯庵）の墓誌銘にも誤りのある可能性がある．よって，今後，この手術の実施やその際に華岡流麻酔法が用いられたことを他の史資料で確認する必要がある．また，順亭（魯庵）が嘉永元年に下士に，安政4年（1857）には中士に出世したことの裏付けが取れれば，藩主に対する順亭の相当な働きを期待された証拠，あるいは実際の働きを示す証拠となり，この手術が実施されたことの傍証になると思われる．

8. 結　論

華岡青洲の門人による華岡流麻酔法の普及を示す一事例を発掘した．青洲の門人である，豊後国日出藩の小田順亭（魯庵）には別の師として帆足萬里がいる．今回，萬里の妻（秋山氏・さき）の乳瘍を順亭が全身麻酔薬・麻沸湯を用いて手術したことを示す，萬里から順亭（魯庵）に贈られた賦の原史料を再発見した．この手術の実施を示す別の証拠である，萬里の吉井改邑宛書簡も再確認した．

『帆足萬里全集―上巻』に活字化されている賦には11字の重大な誤字脱字があり，『増補 帆足萬里全集―第4巻』に活字化されている書簡には少なくとも1字の誤字がある．

『帆足萬里全集―上巻』記載の賦の作成年を基にすると，さきの術後生存期間は6年2ヶ月以上となる．また，さきの戒名は従来知られていた「心月妙光大姉」のみではなく，院号と誉号も付された「法運院貞譽心月妙光大姉」である．

順亭は嘉永元年に日出藩第14代藩主，木下俊方公の痔の手術も行った可能性がある．

本論文の主要部分は，第117回日本医史学会学術大会（2016年5月22日，広島）において発表および討論した．

謝　辞

大分県杵築市の山香中学校元校長，帯刀浩至氏には，帆足萬里が小田順亭（魯庵）に贈った賦の原史料の所在をはじめ，貴重な情報をいただきました．同県日出町の大神小学校元校長，武内　淳氏には，帆足萬里が吉井改邑に宛てた書簡の写真撮影をさせていただきました．日出町の浄土宗浄土院龍泉寺住職，山﨑祐介上人には過去帳の写真提供と論文への掲載許可および墓所への立ち入り許可をいただきました．同じく日出町の曹洞宗康徳山松屋寺住職，蔵山大顕方丈には墓所への立ち入りを許可していただきました．また，杵築市の旧山香町元教育長，船木晴男氏には小田順亭（魯庵）に関係する資料を提供していただき，日出町

立萬里図書館の重岡由美氏には資料収集に関して多大な協力をいただきました．以上の皆様に対して，深甚なる感謝の意を表します．

参考文献および注

1）Matsuki A. Seishu Hanaoka and His Medicine. 2nd ed. Hirosaki: Hirosaki University Press; 2011. p. 8.
2）松木明知．華岡青洲と麻沸散．改訂版．東京：真興交易（株）医書出版部；2008．p. 23.
3）松木明知．華岡青洲と最初の全麻下乳癌手術の期日．麻酔 1972；21(3): 300–301.
4）野島寿三郎編．日本暦西暦月日対照表．東京：日外アソシエーツ；1987．p. 221–290.
5）松木明知．華岡青洲と藍屋利兵衛の母．日本医事新報 1971；2467: 120.
6）文献 1）p. 75–76.
7）文献 2）p. 45.
8）森　慶三，市原　硬，竹林　弘編．医聖 華岡青洲．和歌山：医聖 華岡青洲先生顕彰会；1964．p. 1–3.
9）https://imss.org/japan-room/ 2016年9月26日参照.
10）小川鼎三．医学の歴史（中公新書 39）．東京：中央公論社；1964．p. 153.
11）稲田　豊．麻酔の歴史．山村秀夫編．臨床麻酔学書 上巻．東京：金原出版；1978．p. 4.
12）松木明知．華岡青洲の麻酔法の普及について――福井藩橋本左内による手術症例の検討――．日本医史学雑誌 1996；42(3): 289–302.
13）文献 2）p. 191–193.
14）文献 2）p. 194.
15）松木明知．津軽における最初の全身麻酔――藩医三上道隆の事績――．日本医史学雑誌 1987；33(2): 203–217.
16）松木明知（引用箇所は松木明知，佐藤　裕共著）．続 麻酔科学の源流．東京：真興交易(株) 医書出版部；2009．p. 169–187.
17）松木明知．華岡青洲と「乳巖治験録」．弘前：松木明知；2004．p. 58–61.
18）松木明知．麻酔科学史研究最近の知見（9）――華岡青洲の麻酔法はいつまで行われたか――．麻酔 1980；29(8): 828–830.
19）文献 1）p. 140.
20）山内一信，不破　洋．不破家華岡流手術記録の検討．日本医史学雑誌 1996；42(1): 61–76.
21）梶谷光弘．帰国後の医療活動．華岡家門人大森加善の医術．島根大学附属図書館医学分館大森文庫出版編集委員会編．華岡流医術の世界．出雲：ワン・ライン；2008．p. 112–113，p. 232–235.
22）青木歳幸．文政7年（1824）佐賀における麻酔手術――華岡門人 井上友庵の事例――．日本医史学雑誌 2009；55(2): 149.
23）金谷　貢，金谷桂子．華岡青洲の無名の弟子・小田順亭（魯庵）が華岡流麻酔法を用いて行った手術の事例．日本医史学雑誌 2016；62(2): 178.
24）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p. 512（復刻版　京都：思文閣；1971．p. 512）.
25）木村　礎，藤野　保，村上　直編．藩史大事典 第7巻（九州編）．東京：雄山閣；1988．p. 394.
26）文献の日出藩領[67]を現在の地図と照合すると，おおよそ日出町の大部分，杵築市山香町の旧立石領を除いた部分，および杵築市の八坂と大片平を含むあたりとなる．
27）帆足紀念文庫編．帆足萬里先生略傳．大分・日出：帆足紀念文庫；1911．p. 74.
　順亭（魯庵）に関する記述は1行余りであるが，この文献の編集方針と発行年[68]から独自性が認められると判断した．
28）帆足記念図書館編．帆足萬里全集 上巻．大分・日出：帆足記念図書館；1926．p. 18（復刻版　増補 帆足萬里全集 第1巻．東京：ぺりかん社；1988．p. 18）.
29）小野精一編．増補 帆足萬里全集 第4巻（1938年刊行の私家版の複刻）．東京：ぺりかん社；1988．p. 456.
30）久多羅木儀一郎．帆足萬里略傳．大分・日出：帆足萬里先生百年祭協賛会；1951．p. 79–80.
31）大塚富吉編著．帆足萬里先生門下小伝．大分：大分県郷土文化研究会；1951．p. 5–6.
32）大竹義則編．日出史談あれこれ（図書館叢書第4集）．大分・日出：日出町立萬里図書館；1969．p. 21–23.
33）大塚富吉編著．帆足萬里先生門下小伝．改訂増版．大分・日出：日出町教育委員会；1971．p. 26–27.
34）大竹義則編．暘城人物伝（図書館叢書第5集）．大分・日出：日出町立萬里図書館；1971．p. 15–17.
35）山香町誌編集委員会編．山香町誌．大分・山香：大分県速見郡山香町役場；1982．p. 861–862.
36）十時英司編．毛利空桑全集．大分・鶴崎：毛利空桑先生追遠会；1934．p. 577–578.
37）当時の産科では賀川家が有名であり[69]，また，賀川家と奥家は結びつきが強かったので[70]，「賀川」が正しいと思われる．
38）小林祥泰．『華岡流医術の世界』発刊にあたって．文献 21）p. 10–11.
39）梶谷光弘．天保五年当時の華岡家「春林軒」における医学修業の実態について（二）――大森泰輔（不明堂三楽）の塾中日記「南遊雑記 一・二」の翻刻――．古代文化研究 2008；(16): 176–208.
40）梶谷光弘．天保五年当時の華岡家「春林軒」における医学修業の実態について（一）――大森泰輔（不明堂三楽）の塾中日記「南遊雑記 一・二」の翻刻――．

古代文化研究 2007；(15): 161–190.

41）島根大学附属図書館医学分館大森文庫出版編集委員会．写真で見る大森文庫．文献 21）p. 6.

42）梶谷光弘．華岡家「春林軒」における医学修業．文献 21）p. 89–90.

43）文献 2）p. 212.

44）文献 24）p. 432.

「……修平先生娘内塾，夫々……」の「娘」は，文献 40）の同様の記述より，翻刻の際の誤りであり，正しくは「始」と思われる．

45）文献 42）p. 101–102.

46）文献 28）p. 603.

47）帆足圖南次．帆足萬里と醫學．東京：甲陽書房；1983．p. 119–120.

48）文献 29）p. 476.

49）「鉤吻」は植物で，草本と木本の 2 種があり，いずれも劇毒がある[71]．

50）「汞霜」は辞典類には見あたらなかったが，「汞」は水銀であり，「霜」には白い粉末の意味があることから，水銀と明礬から製造される薬品である「汞粉[72]」のようなものではないかと思われる．

51）文献 28）奥付．

52）文献 29）奥付．

53）文献 29）p. 173.

54）増補 帆足萬里全集―第 4 巻では，『天保六年日出藩御家中御人帳』から一部引用して，次のように記されている．

「吉井改邑氏は同藩士で，拾五石四人扶持とは天保六年御家人御人帳にある，猶文化十一年醫術修業のため二人扶持，同十三出府修業四人扶持，文政元年六月下着，同六年藝州へ醫術修業四人扶持，同七年下着，天保三年御切米加増，父純臺跡式御給人格立身，云々とある．」[73]

この記述の出典である『天保六年日出藩御家中御人帳』は翻刻され，「大分県日出藩史料（18）」として刊行されているが，「限定出版 25 部」とあり[74]，資料の入手には困難を伴うと思われ，数行の文でもあるので，以下に全文を示す．

「一，同（筆者注 「御切米」を指す[75]） 拾五石　四人扶持　　吉井改邑
文化十一$_{甲戌}$十月医術爲修行他出中二人扶持被下置　同十三$_{丙子}$三月医師爲修行出府ニ付乗船当日ヨリ修行扶持四人扶持被下置　同年五月於江府御叙御目見　文政元$_{戊寅}$六月下着ニ付修行扶持被召上　同六$_{癸未}$二月芸州$_{江}$医術修行罷越候ニ付乗船当日ヨリ四人扶持被下置御番医御中小姓格式御雇　同十二$_{己丑}$正月御切米十四石被下置　天保三$_{壬辰}$九月御切米一石御加増父純台跡御給人格立身」[76]

両記述を比較すると，全集―第 4 巻にある「同七年下着」が，大分県日出藩史料（18）にはない．この理由として，翻刻前の原史料の『天保六年日出藩御家中御人帳』には「同七年下着」に類する記述があり，全集―第 4 巻にはそれが引用されたが，翻刻の際などにこの部分が欠落し，そのまま大分県日出藩史料（18）として刊行されたことが考えられる．

55）文献 28）p. 25.

56）文献 29）p. 474.

57）文献 29）p. 479.

58）文献 28）p. 24.

59）院号「法運院」については，戒名によく見られる「蓮」の文字がくずされて「運」に見えている可能性も考えられる．しかし，図 4–左図の 3，4 および 6 人目の戒名では「蓮」の文字ははっきり「蓮」と読める書き方をされている．図 4–中央および左の図は，「誉」「信」「女」などの共通する文字の筆跡から同一人物（おそらく当時の住職）によって書かれたと思われるので，さき夫人の戒名の後に記入者が代わったことは考えられない．したがって，もし，院号が「法蓮院」ならば，そう読めるように書かれたはずと考えられ，この場合は「法運院」で間違いないと思われる．

帆足龍吉については，『明治二年日出藩御家中御人帳（その一）』[77] に，「知行　百五拾石　帆足龍吉　嘉永四辛亥二月養父里吉（筆者注　萬里の通称）家督百九十石被下置，……」とある．また，『帆足萬里全集―上巻』の「帆足文簡先生墓碑銘」に「吉田氏子齊爲嗣[55]」，同じく「帆足萬里先生小傳」に「……吉田氏ノ子亮吉ヲ以テ嗣ト爲ス，亮吉字ハ子徳，東洋又ハ守拙ト號ス，……維新ノ際徴士トナリテ集（ママ）議院ニ出テ，……後チ藩ノ権大參事トナリ，……縣會ノ初メテ開カルヽヤ，推サレテ議員トナリ，明治十六年病ンテ家ニ歿ス，享年四十九，私謚シテ文定先生ト曰フ，……[78]」とある．

60）松木明知．千葉良蔵の「辨乳岩証并治法艸稿」と「乳岩辨証」（「乳岩辨」）」――1811 年における華岡青洲の「乳岩」治療の実際――．日本医史学雑誌 2016；62(4): 429-437.

61）帆足萬里．乳岩辨．

ここで参考にしたのは，「京都帝国大学富士川本目録」に「帆足先生雑著　帆足万里　写　和中　牛痘論　熱病論　吉那弁　癩風弁　乳岩弁　ホ・1」と記されている 12 丁からなる写本で，「乳岩辨」は 8 丁裏から 11 丁裏までの 3 丁半に記されている．

62）文献 24）p. 274–286.

63）松木明知．華岡青洲の新研究．弘前：松木明知；2002．p. 180–217.

64）毛利空桑も帆足萬里の門人であり，順亭（魯庵）の兄弟子にあたる[79]．

65）「釈褐」は，熟語として「しゃくかつ[80,81]，せきかつ[80]」と読むことも，「褐（かつ）を釈（と）く[80,82]」と読むこともできるが，ここでは「君釈二褐階下士一．」と返り点が付

されており，熟語となっている．意味は，身分の低いものが着る衣服をぬいで役人の服を着る，始めて仕官する，等である[80,81]．この返り点に従う場合，「君，階（級が）下士となり，釈褐（はじめて仕官）す.」となり，記述の仕方が逆のように思われる．原文の流れと，4つ後の文に，「安政四年階二中士一.」と返り点が付されていることを参考にすると，「君釈褐階二下士一.」と返り点を付して，「君，釈褐（はじめて仕官）し，下士にのぼる.」としてもよいように思われる．

66）文献2）p. 29–30.

以下，「注」において参考にした文献.

67）大分県総務部総務課編．大分県史 近世編Ⅱ．大分：大分県；1985．p. 158，p. 256.
68）文献27）p. 75，奥付.
69）梶　完次，（藤井尚久 補）．明治前日本産婦人科史．日本学士院日本科学史刊行会編．明治前日本医学史 第4巻．増訂復刻版．東京：日本古医学資料センター；1978．p. 160.
70）文献69）p. 176.
71）諸橋轍次．大漢和辞典 巻11．修訂第2版．東京：大修館書店；1990．p. 521.
72）諸橋轍次．大漢和辞典 巻6．修訂第2版．東京：大修館書店；1989．p. 917.
73）文献29）p. 174.
74）佐藤　暁編．天保六年日出藩御家中御人帳（大分県日出藩史料18）．大分・日出：日出藩史料刊行会；1975．奥付.
75）文献74）p. 47.
76）文献74）p. 58.
77）佐藤　暁編．明治二年日出藩御家中御人帳（その一）（大分県日出藩史料20）．大分・日出：日出藩史料刊行会；1977．p. 51–52.
78）文献28）p. 11.
79）文献33）p. 90–91.
80）鎌田　正，米山寅太郎．大漢語林．東京：大修館書店；1992．p. 1421.
81）文献71）p. 409.
82）諸橋轍次．大漢和辞典 巻10．修訂第2版．東京：大修館書店；1990．p. 247.

Surgical Cases Using General Anesthesia with Mafutsuto Performed by Juntei (Roan) Oda, Seishu Hanaoka's Disciple

Mitsugu KANATANI[1] and Keiko KANATANI[2]

[1] Division of Biomimetics, Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences
[2] Shumeikan Niigata

Several cases that raise the evaluation of Seishu Hanaoka's educational achievements have been discovered in recent years. As one of such cases, the authors discovered "A Surgical Case Using General Anesthesia with Mafutsuto Performed by Juntei (Roan) Oda, Seishu Hanaoka's Disciple".

Oda had Banri Hoashi as another mentor in the Hiji Domain. This time, the authors rediscovered original historical material with Chinese poetry that was sent to Oda by Hoashi. In this original historical material, it is written that Oda operated on Hoashi's wife, Saki, for the breast disease using Mafutsuto. Furthermore, the authors reconfirmed a letter which Hoashi addressed to Kaiyu Yoshii, and it provides further evidence which shows that this operation was carried out. Serious misprints of eleven characters were found in the Chinese poetry published in the complete works of Banri Hoashi, in comparison with the original historical material. The post-operative survival time of Saki may have been more than six years and two months, judging from the year of the writing of the Chinese poetry in the complete works of Banri Hoashi. Saki's correct posthumous Buddhist name is Houn-in Teiyo Shingetsu Myoko Daishi.

In another case, Oda might have operated for hemorrhoids on Toshikata Kinoshita, the 14th lord of the Hiji Domain, in 1848.

Key words: Juntei Oda (Roan Oda), Hanaoka style general anesthesia, Mafutsuto, Seishu Hanaoka's disciple, Banri Hoashi's disciple